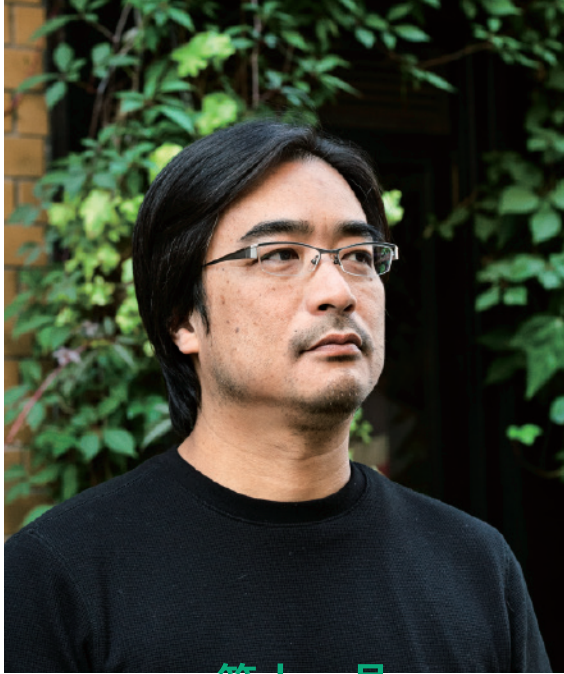


一概には言えないこの世界で

岸政彦 (社会学者)
石川直樹 (写真家)
寺尾紗穂 (シンガー・ソングライター)

Masahiko Kishi



第十一号

011



Naoki Ishikawa

TOKYO PAPER for Culture

トーキョーペーパー

オルタナティブトーキョー

Saho Terao



研究テーマ⑪

東京、この街の手触りを探して

アツカン通信：
日比野克彦 (アーティスト)

「多様性」という言葉は実に機能的だ。例えば大切な友人と喧嘩をしたとき。仕事先で納得のいかない出来事があったとき。「人は自分とは違う。多様だから」と、自分を納得させる手段にもなる。でもその一方で、多様性は人の思考を停止させることもある。なぜなら相手との関係性を「多様である」と片づけることで、その先にある、自分にはなかった世界や視点に気づくチャンスを失うことにも繋がるから。自分とは決定的に違うもの。その違いの先にあるものにちゃんと触れることで見えてくる世界が、どうやらある。その世界をどれだけこの街で広げられるだろう。

The word “diversity” is really quite useful. When you quarrel with a valued friend, or when something happens at work that you just can’t stomach, the word is a handy means of self-persuasion: “Well, not everyone’s like me,” you can say. “People are diverse.” At the same time, this notion of diversity can also close off further thought. Once you sweep your relationship with someone under the rug of diversity, you lose the opportunity they offer to discover a world-view or perspective that’s new to you. There are worlds that can be seen only after you take the next step and really come into contact with the decidedly different. How far and wide can we extend such worlds in our city?

2015 DECEMBER
ELEVENTH ISSUE
011

東京の文化を研究する
フリーペーパー



一概には言えない

In A World That Resists Being

Wrapped Up Neatly

この世界で



そのルーツは江戸時代まで遡れる築地市場。
開設から約80年が経った今も、日本の食文化を支え、作り上げている築地市場には、
日々世界各国から多種多様な人たちが訪れ行き交っています。
まさに文化の交差点とも言えるこの場所から、「多様性」を入り口にした鼎談がはじまりました。

The Tsukiji Market has roots dating back to the Edo Period.
Even today — eighty years after its establishment — the market continues to sustain and inspire
Japanese culinary culture even as it draws a wide array of visitors from all around the world every day.
Our roundtable begins by talking at the market, a true “crossroads of cultures,” about diversity.

個人の小さな物語をすくって

岸政彦（以下、岸）：寺尾さんと石川さん、それぞれの活動がすでに多様性に満ちていますよね。まず寺尾さん。原発労働者を訪ね歩きまとめた証言集、『原発労働者』（2015年）やサイパン、沖縄、八丈島と足を運び、そこで日本の南洋統治時代を知る人たちへの取材を通して書いた『南洋と私』（2015年）など、ノンフィクションをベースにした書き手として活動しながら、同時に曲を作り、歌うことも続けていますが、きっと大抵の人は、これらの活動すべてが同一人物によるものだと、最初は気づかないと思うんです。でもきっと寺尾さんのなかでは、ひとつの矛盾もないんだろうなと思うのですが、どうですか？

寺尾紗穂（以下、寺尾）：そうですね。私は小さい頃から本を読むことも自分で書くことも、曲を作って歌うことも全部好きでした。書く上では、ずっとエッセイが好きだったので、『南洋と私』については、そ

の発展版のようなイメージで取り組んできたように思います。

岸：『南洋と私』の冒頭は、確か大学時代の恋人と訪ねた屋久島の海岸で水着を忘れるシーンから入るじゃないですか。本題からかけ離れた話から物語ははじまりますが、そうやって実際の取材に至るまでに起きたことを寺尾さんはかなり丁寧に書かれています。その発想、構成は最初から頭にあったんですか？

寺尾：やっぱりエッセイ、というのがまず頭にあるのと同時に、最初の頃は観光を目的に屋久島へ行っていたので、旅行記のような側面もあると思います。

岸：結構複雑な本ですよ。そしてそれを意外なほどに淡々と書き綴られています。実はかなり度胸がいる本だと思っているんです。なかなか書けないですよ。また『原発労働者』では実際に原発で働いた方たちに直接取材をしていますよね。このガチで取材をして書くということは、かなり労力があることだと思うのですが、そこに苦痛は伴わないですか？

石川直樹

写真家

Naoki Ishikawa

岸政彦

社会学者

Masahiko Kishi

寺尾紗穂

シンガー・ソングライター

Saho Terao

寺尾：知りたいという思いの方が強くて、あまり苦痛は伴わないですね。岸さん自身も取材を通して本を書かれています。苦痛はありますか？

岸：僕はすごく苦手です。できればやりたくないくらいに。じゃあなぜ今、社会学者として様々な人に取材しているのかというと、その原点は高校生の頃、スタッズ・ターケル（※）の本にすごくはまったことが大きい。ターケルは、無名の人たちにイ

多様性ってどういうこと？

What's diversity?

ンタビューをした記録を編集せずにそのまま掲載するという本を出しているんですけど、それを読んだ当時の僕は「こんなに面白い本があるんだ。自分もこういう本を書いてみたい」と思ったんです。でもそのためには取材は絶対にはずせないじゃないですか。それで自分なりにいろいろ試行錯誤しながら今に至りますけど、やっぱり基本的にはいつも苦痛です。石川さんもまた様々な地でいろんな人に出会っていますが、苦痛とは思いませんか？

石川直樹（以下、石川）：僕は知らない人に話しかけることは全然苦痛ではないです。子供の頃から人見知りすることもあんまりないんです。僕自身のことをたくさん語ったりするのだけは、ちょっと苦手意識があるくらいで。

岸：僕は石川さんの著書『この地球を受け継ぐ者へ』（2001年）と、写真集『渦と里山』（2015年）を拝見していますが、前者は冒険することへの喜びと若さに満ち溢れた青春物語で、後者は新潟の自然と暮らしの関わりを見つめ直した、すごく内省的な物語だと受け取りました。つまり石川さんは両極端な振幅を持っていると。そこで気になったのは、これだけ旅を重ねながらいろんな振幅を持つということは、逆に固定した関係性というか、固定した暮らしみたいなものに対する嫌悪感を持っていたりするのかなあと。

石川：嫌悪感はないです。ただ、僕自身はいつも変幻自在でありたいというか、常に変化をしたい

んです。という、何か気取ったように聞こえてしまうかもしれないんですけど、要は自分のアイデンティティがあんまりないというか、根無し草の典型だと思っています。僕は東京生まれ、東京育ちですけど、東京がホームだという感覚もないんですね。たとえ長期の旅から東京に戻ってきても「帰ってきた」という感覚もなくて。むしろ雨風さえ凌げれば、そこがホームになるというか。だから僕にとって東京のイメージは無色透明です。そんな僕からすると、みんなそれぞれ故郷があるのがすごいなあって思います。例えば沖縄に行ったりすると、個人のアイデンティティがその土地に結構密着しているじゃないですか。そういう場面に出会うと、やっぱりどこかうらやましく思ったりします。岸さんの根っこの部分、アイデンティティは出身地にあったりしますか？

岸：これがまったくないんです。そう、それが関係しているのか、実はこの前人に言われて初めて気づいたことがあって。それは僕が書いた論文や本には中間集団が登場しないってということなんです。

石川：中間集団というとは？

岸：人から「地元や親戚、家族という中間集団が抜けたまま、大きな社会構造のなかでもがいている個人ばかりを書いているね」と言われたんです。僕はそれを受けて確かにそうかもしれないなっていました。

寺尾：岸さんの『断片的なものの社会学』（2015年）

を読みました。ああいった文章を学者の人が書いたってことが、まず私のなかではすごく驚きでした。『南洋と私』を出版したときに刊行記念で渋谷にある書店で岸さんのご友人である作家の星野智幸さんと対談させていただいたんですけど、「個人的な物語を見つめていこうという流れが今の時代にはある」というようなお話になって、それはとてもいいことだなあって思っていたんです。

岸：そうですね。社会学上、もう一度、ちゃんと社会調査を地味にしようよっていうのはありますね。これは余談ですけど『断片的なものの社会学』このタイトルに至るまで、「社会学」を入れるかどうかというのをすごく悩んだんです。でも今、結果的に入れて良かったと本当に思っています。というのも、意外にもいろんな方から「社会学は嫌いだったけど、この本で考えが変わりました、印象が変わりま



した」と言われることが多くて。嬉しいですね。と同時に「俺たち社会学者は嫌われていたんだ」と気づくわけですけど（笑）。

他者を受け止める器になる

石川：インタビューにおいて面白いと思うのは、こちらが相手に核心を聞こうとして、結果的に本題ではないところ、例えばちょっとした雑談だったり、その人の仕草や身振りだったりから出てくるささやかなことが、実は本質をついていることがあったりす

ることなんです。さっき岸さんはインタビューを編集せずにそのまま記録した本が好きだったと言っていましたけれど、もしかするとそういう部分があるのではないかなって。

岸：確かにそうですね。写真だと、それはどうですか？ 予期せぬものが何かと写っていた場合とか。

石川：そもそも写真の面白さとは、予期しない何かが写り込むことにあります。偶然を排除した写真は広告写真になっちゃうわけで、僕が撮る写真はむしろ偶然をどんどん取り込んでいく。自分が意識していなかったものが写っていたときにこそ喜びを感じ

るというか、写真そのものの強みが出るんだと思いますね。

岸：それはわかる気がします。僕自身、社会学をやる上で、現場の人の話を聞くしかないと考えて聞きに行っているわけですけど、そこでいろんな人に会えば会うほど予期しない方向にいて自分の意見もどんどん変化していった。で、結果として取材対象に対して僕は一概に言えなくなっていくんです。

石川：一概に言えなくする。それは写真家と同じですね。一方向からしか見られない、例えばメッセージを乗せた写真なんかはつまらない。

岸：言われてみれば、そうかもしれませんね。徹底的に見て聞いて記録したものを変に自分のなかで意味づけしないで、そのまんまを書くというか。例えば夜中に近所を歩いていたら、前から全裸のおっさんとすれ違ったんですよ。怖いじゃないですか。でもよくみたらそのおっさん、洗面器を持っているんですよ。あ、銭湯へ行くのかってね（笑）。全裸で銭湯行くのって、超合理的じゃないですか。そういう社会の断片を書いていく。

一同：（笑）
石川：寺尾さんは、そこはどうですか？ 自分の活動は自分を通じた世界の記録という意識はありますか？
寺尾：書くことも音楽を作ることも歌うこともすべて



この世界を知るに 必要な条件とは？

What conditions are necessary to know our world?

は自分自身の記録という側面はあります。あと最近すごく感じているのが、書くことよりも歌うことのほうが受動的になって。

岸：受動的とは？

寺尾：受け身でいるんです。というのも自分で作った歌を歌ったときに、急に他者の感情が入ってくることがあって。それには自分でもびっくりしました。確か自分の娘を虐待して殺してしまった母親のニュースを見たあとに歌ったんですけど、それまでは自分のことを書いて歌っていたのに、その時なぜかその母親の気持ちが自分のなかに入り込んできて、気づいたら、歌いながら泣いていたんです。そう、だから「歌は器」と言われたりもしますが、歌を歌うっていうのは能動的に見えて、実はすごく外にひらかれている、すごく受動的な何かを受け入れる行為でもあるのかなって。今はそう思うようになりました。

岸：音楽は他者にとっての器になると。

寺尾：もちろん、いつも他者の器になるとは限らないんですが、でもライブを観に来てくださるお客さんの気持ちが入り込むことはよくあるんですよ。以前、主催者の方から「今日はダウン症の娘さんを持つお母さんがいらしていて、寺尾さんのあの歌をどうしても聴きたいとおっしゃっているので、ぜひやってください」と言われて。本番で歌っていたら自然と涙がこみ上げてきて、泣くのを我慢しながら歌ったんです。それはきっとその母親の気持ちというものを追体験するというか、自分が歌うことによって、別の角度からその人の気持ちを教えてもらうような経験をしているんです。

石川：寺尾さんの今の話はすごく共感できますね。僕も、僕自身が発信しているというよりも、向こう

から飛んでくるものをカメラで受け止めながら、ただシャッターを切っている感じなんです。例えば向こうから弓矢が飛んできたとします。その弓矢を弓矢として僕が認識して撮ったら、それはただの弓矢の写真になってしまう。僕はそんな写真は撮りたくなくて、言葉や意味に置き換わる以前、つまり「何かが飛んできたぞ」というときに撮りたい。だから、自分の主観で世界を意図的に切りとったり、説明的な写真を撮ることにはまったく興味がありません。それよりも何かこう……、言葉以前の叫びのような、もごもごとしたものをそのまま提出したい。

寺尾：石川さんはこの世界を知りたいっていう、好奇心が先立っているんですね。私自身もそうかもしれません。生きているといろんな問題があってそれに反応はするけれど、そこで悩んで前へ進めなくなるということはあまりなくて。だったらその状況を変えるために自分はどう動けばいいのか？ そこは自分を転換していくことだけ考えます。そのために世界を知って、おかしいところは直すために動いていきたい。

石川：都市に生きる人たちってまず周りの環境を変えたいですよね。例えば寒かったら暖房、暑かったら冷房っていうように。でも、これがヒマラヤの山中にいたら、冷房も暖房もないから自分が変わっていくしかない。実際、高山に登るときに何が一番大切かって体力よりも順応力なんですよ。つまり薄い酸素のなかでも生きられるように、自分の体を変えていくということ。僕はそれに慣れてしまったんですよ。いろんな旅を通じて。さっき「変幻自在でありたい」と言いましたが、実際、たとえどんな環境であっても、ちゃんとそこで生きていけるようにしていたっていう気持ちもそこにはあるんだと思います。

岸：僕は石川さんのようにどこでも寝られるような順応力はないですが（笑）、人の語りを聞き取っているときは、ただその語りに身を任せるようにしています。自分から話を聞くというよりも、その人が語りたように語ってもらって、それを受け取らせてもらう、ということをしている気がします。

※スタッズ・ターケル 1912年NY生まれ。2008年没。ラジオパーソナリティやテレビ番組のホストとして活躍するなかで、後に「口述の歴史（オーラル・ヒストリー）」と呼ばれる独自のインタビュースタイルを確立した。著書『よい戦争』でピューリッツァー賞受賞。

Listen to Small, Personal Stories

Masahiko Kishi: Terao, your work — much like Ishikawa's — spans a diverse range, doesn't it? In addition to your work as a primarily non-fiction writer, such as *Genpatsu rodosha* [Nuclear Power Plant Workers] (2015), a collection of oral testimonies you gathered while visiting nuclear power plant workers, and *Nanyo to watashi* [The South Seas and Me] (2015), based on interviews you conducted in Saipan, Okinawa, and Hachijojima Island with people who remember when Japan governed the South Seas, you also continue to write and sing songs. I'll bet most people don't realize at first that the same person is responsible for all this activity. At the same time, I imagine you probably don't sense any internal contradiction at all.

Saho Terao: That's right. Ever since I was little I enjoyed reading books and writing my own stories and writing and singing songs — all of it. As a writer, I've always been partial to essays so I think I've approached *The South Seas and Me* I've written as extensions of that form.

Kishi: You begin *The South Seas and Me*, if I remember correctly, by describing a visit to Yakushima with your boyfriend during university and how you forgot your bathing suit on the shore. Your tale begins with a story quite far removed from the book's main topic, and then you write in some detail about the events that lead you to the actual interviews. Was this concept, this structure, clear to you right from the outset?

Terao: Well, I suppose first of all I'm conscious of the form of essays. At the same time, when I first went to Yakushima I did so as a tourist, so there's also an element of travelogue.

Kishi: It's a fairly complicated book, isn't it? Although written in a surprisingly dispassionate tone, it must have taken real nerve to put together. It's sure not the sort of thing anybody could write. And then for *Nuclear Power Plant Workers* you personally interviewed people who had worked at nuclear power plants, didn't you? I imagine getting so directly involved must make for a really labor intensive process. Didn't this ever seem a hardship?

Terao: My desire to understand is more powerful, so there's very little by way of hardship. You yourself write books based on interviews; do you suffer through them?

Kishi: They're not my forte. In fact, if I could get away without doing them at all, I would. So why do I interview all sorts of people as a sociologist? One major reason is that I was completely hooked on the work of Studs Terkel* when I was in high school. Terkel's books were built around interviews — unedited, just as they were — with ordinary people. At the time I thought they were just incredibly interesting, the kind of books I wanted to write myself. But first I'd have to do the interviews, right? I've muddled along as best I can by trial and error, but they're always a struggle. Ishikawa, you also encounter all kinds of people in your travels. Do you ever find that hard to deal with?

Naoki Ishikawa: I don't have any problem going up to talk with people I don't know. Ever since I was a kid I've never been particularly shy around strangers. I suppose I do find it hard to talk a lot about myself, though.

Kishi: Ishikawa, I've had a chance to read your book *Kono hoshi wo uketsugu mono* e [To Those Who Will Inherit the Earth] (2001) and your photo collection *KATA and SATOYAMA* [Lagoons and Local Woodlands] (2015). The former is a kind of coming-of-age tale overflowing with the energy of youth and a delight in adventure, while the latter reconsiders the relationship between nature and way of life in Niigata, something I took as a deeply introspective tale. In other words, you're able to swing to both extremes. What concerned me a bit, though, was — given your extensive travels and considerable versatility — whether you might feel a sense of antipathy toward fixed relationships, toward settled lifestyles?

Ishikawa: No antipathy at all. But, for my part I want to stay adaptable, always changing. What I mean is, and I know this may sound a bit affected, I don't have much of an identity myself — I think I'm more of a typical drifter. I was born and raised in Tokyo, but the city doesn't feel like home at all. When I come back to Tokyo after a long trip, for example, it doesn't



feel like a coming home. Really, home is wherever I can find shelter from the wind and the rain. So the image I have of Tokyo is colorless and transparent. So I'm always amazed at how everyone else seems to have a hometown. If you go to Okinawa, for example, you can tell how closely people's identity as individuals is tied to the land, can't you? I suppose I'm a bit envious in situations like that. Kishi, do you find your core identity tied up where you're from?

Kishi: Not at all. Maybe this has something to do with something I realized for the first time when someone pointed it out the other day: that intermediate groups never appear in my papers and books.

Ishikawa: Intermediate groups?

Kishi: Somebody said, "You write about individuals struggling within overarching social structures, without addressing intermediate groups such as local community, extended relations, or family." I have to admit this struck me as an apt observation.

Terao: Kishi, I read your book *Danpenteki na mono no shakaigaku* [The Sociology of Fragmentary Things] (2015) and was really surprised that an academic could write like that. At a launch event for *The South Seas and Me*, held at a bookshop in Shibuya, I did a talk show with a friend of yours, the writer Tomoyuki Hoshino. He talked about how we needed to look closely at personal stories, that *this* was the tide of the times, something that struck me as a really good thing.

Kishi: Right. From a sociological perspective, there is this notion that we need to get back to doing the unglamorous work of social research. By the way, for *The Sociology of Fragmentary Things* I really worried a lot about whether to include "sociology" in the title. I think it was the right decision in the end, though, because so many people have told me that they used to hate sociology but the book changed their minds. I'm really happy about that. At the same time, of course, it's also a reminder that we sociologists are a hated bunch. (laughs)

Have the Capacity to Accept Others

Ishikawa: What I find interesting about interviews is how, when I'm trying to get at somebody's core issue, in the end the essential bits are often revealed not so much by what we talk about but by something trivial mentioned in passing, or some gesture, or the way the other person holds themselves. Kishi, you said that you liked books of interviews just as they are, without editing, and I wonder if that might be the reason.

Kishi: I think you might be right. What's the analogue with photography? Finding something in a shot that you didn't expect?

Ishikawa: Well, finding that something unexpected has crept into a shot is the most interesting thing about photography. Photographs that leave nothing to chance are just advertising; with my photography I aim to incorporate as much serendipity as I possibly can. I'm really happy when I find I've captured something I wasn't conscious of at all, and I think the photographs themselves are stronger for it.

Kishi: I think I know what you're talking about. As a sociologist I go to talk to people on the ground because that's the only way to get certain kinds of information, and then when I do, I meet all sorts of people and learn all sorts of things that take my research in unexpected directions and change my thinking completely. In the end, I find I just can't wrap things up neatly at all.

Ishikawa: Not being able to wrap things up neatly — it's the same with photographers. Photographs that can only be seen from one angle — like those that are really message-heavy — are just boring.

Kishi: You know, you might be right. Like, rather than trying to ascribe some meaning to things that you've thoroughly observed and listed to and recorded, maybe better to write about them just as they are. For example, I was out walking in the neighborhood one night and this older fellow came walking toward me completely naked. Scary, huh? I looked a little closer, though, saw he was carrying a washbasin, and figured maybe he was going to the public bath. (laughs) There's something perfectly rational about going to the public bath naked, right? These are the kinds of fragments of society that I write about. (Everyone laughs)

Ishikawa: Terao, what do you think? Are you conscious of your work as a record of the world as seen through yourself?

Terao: There's an aspect of writing words and making music and singing songs — all of it — as a record of myself. Also, one of the things I've really realized lately is that singing may be more passive than writing.

Kishi: What do you mean by "passive"?

Terao: More impressionable. What I mean is, one time when I was singing a song I'd written myself in front of other people I found I was overcome by the emotions of others, something that really surprised me. I was singing right after I had heard news about a woman who had abused and killed her own daughter, but even though the song was one I'd written about myself and always sung that way, for some reason I was overcome by the mother's feelings and before I knew it I was crying as I sang. I guess this is why they say "a song is a vessel." Even though singing seems so active, it's actually really open to outside influence, suggestion, and impressions. This is how things seem to me lately.

Kishi: Music as a vessel, then, for other people.

Terao: It isn't always a vessel for others, of course, but I often find myself influenced by the mood of people in the audience when I'm singing live. One time the organizers asked me sing a certain song, saying that there was a woman in the audience who had a daughter with Down's syndrome and really wanted to hear it. When I sang that song during the show the tears started to well up on their own and I had to struggle to keep from crying. I think this was because I was experiencing that mother's feelings for myself, or maybe it's that through singing I was learning about someone's feelings from a different angle.

Ishikawa: I can really relate to what you just said, Terao. With my photography I don't so much feel like I'm conveying something myself as clicking the shutter and using the camera to catch what comes flying in. Let's say an arrow was to come flying in from somewhere. If I'm able to process the arrow as an arrow, then all I get is a photo of an arrow. I don't want to take photographs like that, and instead try to capture those moments before words or meaning, when you're only aware of "Incoming!" So I'm not at all interested in deliberately clipping



out a subjective view of the world or shooting explanatory photographs. I'd much rather, I don't know, capture something less distinct, like a pre-verbal yell, just as it actually is.

Terao: What comes first for you, then, is your curiosity, your desire to learn about the world, right? I think it might be the same with me. Living means facing all sorts of problems, which I respond to but rarely end up worrying about so much that they keep me from moving forward. I just have to think about what I can do to change the situation, to think about how I can change myself. To do this I try to learn about the world and hope to change what I can for the better.

Ishikawa: People who live in cities always seem to want to change their surroundings. They want heat when it's cold and air conditioning when it's warm. When you're up among the Himalayas, though, neither of these are available so you have to change yourself. The most important thing when climbing in the mountains isn't actually stamina so much as adaptability. You have to change your body to survive in a low-oxygen environment. I've gotten used to it in the course of my travels. I said earlier that I wanted to always be changing, and what I meant was that I wanted to be able to find a way to live in any kind of environment.

Kishi: I don't have your adaptability, Ishikawa — your ability to sleep anywhere (laughs) — but when I listen to people I try to give myself over completely to the act of listening. Rather than probing or trying to tease out answers, I feel like I try to listen and take in, from a position of humility, what they want to talk about.

***Studs Terkel** Born in 1912 in New York. Died in 2008. Through his work in radio and television he developed an original style of reportage based on oral histories. He received the Pulitzer Prize for his book *The Good War*.

岸政彦 Masahiko Kishi

1967年生まれ、大阪在住。社会学者。大阪市立大学大学院文学研究科単位取得退学。博士（文学）。龍谷大学社会学部教員。研究テーマは沖縄、被差別部落、生活史。著書に『同化と他者化―戦後沖縄の本土就職者たち』（ナカニシヤ出版）『街の人生』（勁草書房）『断片的なものの社会学』（朝日出版社）など。

Born in 1967 living in Osaka. Kishi is a sociologist. Completed all coursework of the Osaka City University Graduate School of Literature and Human Sciences. Ph.D. Associate Professor in the Faculty of Sociology at Ryukoku University. Research interests include Okinawa, discriminated communities, and life histories. Books include *Doka to tashaka: sengo Okinawa no hondo shushokusha tachi* [Assimilation and Otherization: Post-War Okinawan Migrants in Mainland Japan] (Nakanishiya Publishing), *Machi no jinsei* [The Lives of Cities] (Keiso Shobo), and *Danpenteki na mono no shakaigaku* [The Sociology of Fragmentary Things] (Asahi Press).

石川直樹 Naoki Ishikawa

1977年東京生まれ。写真家。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。人類学、民俗学などの領域に関心を持ち、辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、作品を発表し続けている。著書に『最後の冒険家』（集英社）ほか、多数。最新刊に写真集『国東半島』『髪』『潟と里山』（青土社）がある。

Born in 1977 in Tokyo. Ishikawa is a photographer. Completed the second stage of the doctoral program at the Tokyo University of the Arts Graduate School of Fine Arts. Interested in fields such as anthropology and ethnology, he has continued to produce work while traveling from cities to the hinterlands and all points in between. Books include *Saigo no bokenka* [The Last Adventurer] (Shueisha). His most recent publications are the photography collections *Kunisaki Peninsula, Hair, and KATA and SATOYAMA* (all from Seidosha).

寺尾紗穂 Saho Terao

1981年東京生まれ。シンガー・ソングライター。2007年アルバム『御身 onmi』でメジャー・デビュー。ピアノ弾き語りによるライブやCMソング、企画アルバムのほか、エッセイストとしても活躍。近刊に『南洋と私』（リトルモア）『原発労働者』（講談社現代新書）など。今年3月には最新アルバム『楕円の夢』をリリース。

Born in 1981 in Tokyo. Terao is a singer-songwriter. Her major-label debut came with the 2007 album *Onmi*. In addition to accompanying herself on piano in songs for live performances, commercials, and albums, she is also active as an essayist. Her recent publications are *Nanyo to watashi* [The South Seas and Me] (Little More) and *Genpatsu rodosha* [Nuclear Power Plant Workers] (Kodansha Gendai Shinsho). Her latest album, *Daen no yume* [Dream of the Ellipse], was released this March.